

学食復活プロジェクト

郷土創生特別委員会学食復活プロジェクト

かつて多くの同窓生が、あるいは家庭の事情で弁当が持参できず、あるいは若い胃袋の旺盛な消化能力故の「早弁」後の第三食のため、あるいは同じ釜の飯を食いながらの語

らいの場として、大いに活用した「学食」が今はない。

聞けば、8年前の平成21年、女子生徒の増加で弁当持参率が上昇するなどの背景があったか、学食運営会社が赤字を理由に撤退し、爾来、厨房を

備えた研修会館1階は、その本来の機能と姿を失っているという。

1000人以上が回答

「文武両道」を標榜してやまない当校は、部活や同好会への加入率が130%を超えている。つまり部活掛け持ちの生徒が多い。忙しい学校生活を乗り切りつつ、脳に十分な栄養を届けなければならない大事な成長期にある

竟、食う物に依るのである。将来の郷土創生を担う生徒の胃袋を健全に満たすことは当委員会の管掌義務である、という見地から、今般、学校の全面的な協力を得て、生徒と保護者、教職員を対象にアンケート調査を実施した。その結果1、166人の回答を得て、約8割にあたる921人が学食の復活を強く望んでいることが分かった。これは当委員会の予測とほぼ一致して

生徒・保護者らにアンケート 「必要」が8割も

いる。

新たな運営法を模索

生徒たちにとって、我が母校の食事環境はあまりにも貧弱である。学食がなくなって弁当持参者は増えたが、共働きが普通になっていて今日では、弁当作りの保護者の負担感は大い。健全なる肉體も精神も、畢

当委員会としては、このアンケート結果を受けて、学食の復活プロジェクトに着手した。食堂運用の主体論、方法論、厨房・食堂の整備、衛生管理、メニューの検討、わずか40分間の昼休みでの食事時間の確保など、課題は多岐にわたるが、従来の特定業者への一括委託のような通り一遍のやり方ではなく、今日の秋

田高校にふさわしい方法で、末永く続く形をとりたいと考えている。具体的には、同窓会が運用主体となりつつ、専門業者、OBのボランティアや食材寄付などを組み合わせることや、同窓会による「学食整備・食費支援ファンド」の形成などを検討中である。具体化に向けて同窓生諸氏の絶大なるご支援をお願いしたい。



昭和53年の学食の様子

